

佐藤信夫先生のご退職に寄せて(佐藤信夫教授 須賀 昭徳教授 退職記念号)

著者名(日)	上條 醇
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	74
ページ	3-5
発行年	2014-07-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00003020/

佐藤信夫先生のご退職に寄せて

上 條 醇

佐藤信夫先生は、平成二十五年三月をもってご退職になりました。先生は、昭和六十二年十月にアメリカに交換教授として行かれた英語担当の教員に代わって急遽本学に非常勤講師として赴任され、その後教職担当の教員の急病による退職などがあって、昭和六十三年四月より専任教員になられ、二十五年間勤務されました。担当科目は多岐にわたり、英語、ラテン語、法律ラテン、比較法、西洋法制史、教職の地誌学などを担当されました。

先生は、語学の天才でした。大学卒業後フランスのパリで勉強され、続いてアメリカに渡り、ロスアンジェルズではUCLAで学ぶ傍ら、日系の高校で教鞭もとられました。専門がインドヨーロッパ学ということもあって、各種の言語に精通し理解できる言語は十六カ国語といわれるほどでした。最も得意な言語は何ですか、と問うたところ、やっぱりフランス語かなあと言っておられました。言語に関わる先生の逸話はとても多く、筆者にも印象に残る思い出が沢山あります。

先生と一緒にニューヨークに滞在していた折、もう十一時過ぎだったでしょうか二人でホテルのそばにある寿司屋に行つて寿司を注文したところ、そこにいたウエイトレス達が韓国語で「こんな時間に嫌な客ねえ」と言つていたということです。そこで勘定を支払ったときに佐藤先生が「終わりがけに来て悪かったね」と韓国語で詫びると、

彼女達はびっくり仰天、「とんでもありません」と言つて大慌てだったのでした。先生は、韓国語も中国語もかなり堪能だったので。また、駿河銀行から「駿河」という言葉の語源は何か教えてほしいとの依頼があったそうで、駿河は、サンスクリット語のスバルガが語源で、「光り輝くところ」という意味だと回答したとのことでした。富士山の残雪に太陽の光が当たって輝いている様からの命名だろうと言うのです。先生の面目躍如といったお話です。先生はとても行動力に富み、何でもやつてやろうという精神に満ちていました。自動車の運転免許は当然としても、小型飛行機の操縦免許や船舶の操縦免許を取得され、つい最近まで小型飛行機を操縦して九州や韓国にも渡ったと聞いています。筆者も先生の操縦する小型飛行機（チェロッキー）に乗せていただいたことがあります。やはりアメリカ滞在中のことでした。本学の姉妹校であるオレゴン州のパシフィック大学に学生とともに研修中、近くのヒルズボロ飛行場からワシントン州シアトル近くの飛行場まで約三十分の遊覧飛行でした。とても不安な気持ちで乗ったのですが、飛行機は全く揺れずとてもいい気持ちで居眠りをしてしまうという有様でした。

先生の専門は前述したとおりインドヨーロッパ学でしたからその守備範囲は広く、誰もやらない言語のアルメニア語やグルジア語、ヒッタイト語など単行本を発行されたり、論文を書かれたり、その業績の多さにもびっくりさせられます。これらの業績に対してアルメニア科学アカデミーから先生に対して博士号が授与されました。平成十一年三月十九日に新宿においてその授賞式があり、筆者も授賞式に参列しました。十九日は、地下鉄サリン事件の前の日だったので、よく覚えているのです。

先生は語学の天才ですから、たとえばラテン語の *veritas*（真実あるいは真理という意）という単語について質問すると、その語源やその派生語などについて延々と講義をしてくれます。この経験をされた教員や学生は数知れ

ないと思います。あまりに詳しくしかも難しいので質問した人たちは、すっかり毒気に当てられ次に聞くことを躊躇してしまうほどでした。そして、先生の口癖は「なんだこんなことも知らないのか」で、浅学菲才のわれわれは、いつも恐縮してしまふのでした。

このほか先生は多趣味でしかも食通であられたので、筆者もサンフランシスコやニューヨークのチャイナタウンでの食べ歩きで先生と一緒に珍味を堪能しました。パリ凱旋門近くのレストランでの食事も印象に残っています。ワインもシャトー・マルゴーやシャトー・ロートシルトという世界の五大シャトーの銘柄を色々な機会に先生と楽しむことが出来ましたし、パリの海鮮レストランでは、白ワインのミユスカデやシャブリを味わいました。お陰様で多方面に視野が広がり、とても感謝しております。

最後になりましたが、先生の飽くなき向学心がご退職後も衰えることなく続いていると思われませんが、健康に留意されてなお一層のご研鑽を積まれ、その研究が世界の平和と発展に貢献されることを期待しております。